# 雲晴

秋彼岸号

「雲　晴」第四十八号
令和五年九月一日発行

貞林院瑞正寺
〒125-0041 東京都葛飾区東金町五－四六－五
電話（〇三）三六二七－三四一一
FAX（〇三）五六九九－五九一五

## 釈尊のことば

## 法句経に学ぶ 15

神田寺住職　友松浩志

おのれをととのえ
なすところ
つねにつつしみあり
かく
おのれに克（か）つは
すべての他の人々に
かてるにまさる

法句経　一〇四

「おのれ」、自分というものを、よりよいものに高めていく、それが仏教の基本になる教えです。まず自分をととのえ、そのうえで他の人々に配慮して生きる。そうした人格が仏教の求める「人」の姿です。

簡単なことのようで、これは案外むずかしいことです。人には厳しく、自分には甘いのはよくあることで、自分のことは棚にあげて、とやかく人の悪口を言ったり、批判したりするものです。

まず「自分」に克つ。自分がへこたれていたら、何もできません。多くのスポーツ選手が、そこに焦点をあてて練習しています。相手に克つ前に、自分に克つことが必要です。健康面はもちろんのこと、精神面でも、自分の弱さ、くじけそうな気持ちをふるい立たせていってこそ、よりよい結果が得られるものです。

「自分」というのは、かけがえのないものです。それをより良いものにする、それは、自分の生命を輝かせるということです。それは、両親をはじめ、まわりの人々が最も喜ぶことです。すべての人が、そう生きようとした時、この世の中はもっともっと素晴しいものになるはずです。

五年余にわたって連載させていただいた「法句経に学ぶ」も、今回が最終回です。皆様が経典への学びを続けられ、より良い毎日をお送り頂くことをお祈り致しております。

# 唱歌のふるさと 童謡のくに ⑮

著：佐山哲郎

**自然の歌　季節の歌**

替歌といえば山のうたに多い

**雪よ岩よ我らが宿り**
**俺達や街には住めないからに**

雪山讃歌の歌詞の替歌は数え切れないほどある。多種多様だ。この歌の元歌は民謡。愛しのクレメインタインである。日本語作詞は西堀栄三郎。

桑原武夫らとともに大雪に逢い山小屋に閉じ込められ、その時作った歌という説もある。それが旧制三高の山岳部の校歌となった。

アルプス一万尺ともなると、その替歌は日本中の大学、高校の山岳部、あるいはワンダホォーゲルなどのクラブの数だけあるだろう。歌詞はそれぞれ勇壮にして滑稽。カストロ系下シモネタ系も混ぜれば無慮数千といったところか。昔から山男というものは、少し抒情派、耽美派なところがある。だから歌う。自然に歌う。

**夏になれば　はるかな尾瀬**
**遠い空**

昭和二十四年、戦後ラジオ歌謡の初期の作品である。石井好子の歌声で一気に全国に流行った夏の**思い出**。作詞は江間章子。作曲は中田喜直。

この作曲家は戦後の愛唱歌にとってなくてはならない人物であった。

五月、連休の頃であったか、旅先で筆者は彼の訃報をふと耳にし、思わず合掌し冥福を祈った。

中田喜直の父君はオルガン奏者として著名であった中田章である。この人の作曲で有名なのは

**春は名のみの風の寒さや**

あの早春賦である。

# 華 花ひらひて實をむすぶ 好胤

## ④忍び忍んで なほ忍ぶ

高田都耶子（つやこ）

父が吉野の和紙に向かって揮毫（きごう）しています。「和敬」「空」「心」、そして時折『忍』『忍ぶ』などと認めるのを見ると、苦手やなぁ、かなんなぁと辛抱が苦手な私は溜息をついていたものでした。

さて一人暮らしを始めた頃にふと通りかかったペットショップで、売れずに残っていた痩せこけた犬と目が合いました。嫁に行けない我が身と重なり何だか不憫に思われて、その日から毎日通うこと一ヶ月半。それは、あの犬のために早起きは出来るか、毎日散歩はできるだろうかと自問自答して答えを出すのにかかった日数でした。そしてそののワンコを飼う決心をしました。

犬好きの父から「名前は決めたか？仏教発祥の地であるガンダーラからガンダーちゃんはどうやろなあ」と電話がありました。「ガンダーなんていう立派な犬じゃないんよ。むしろ弱々しい感じで…」と答えると、父が「そうか、それならサハーがいいやろ」と言ったのです。

サハー（或いはサファー）はインドのサンスクリット語です。この世は修行の場、仏教的には「忍土（にんど）」というのだそうで、私に飼われる犬はさぞかし苦労やろう、毎日が修行に違いないということで、彼の名前は「サハー」に決まりました。調べましたら「サハー」という言葉がチャ

# 一口法話

## 「お念仏の花」

「因縁をつけられた・・・」というと、普通は言いがかりをつけられた、という意味ですが、「因縁」とはお釈迦様が説かれたこの世の在り方のことなのです。物事には必ず因（原因）があり、それが縁（諸々の条件）にふれて、果（結果）が生ずるということなのです。

ここに一粒の花の種があるとします。それを机の上に置いて眺めているだけでは、いつまで経っても花は咲きません。適切な時期に、適切な土の深さに植えることが必要です。更に、適切な水や陽の光に恵まれて初めて花が咲くのです。仮に二粒の種を同じようにまいても、片方は花を咲かせ、片方は鳥に食べられたり、踏みつけられて、花を咲かせられないかも知れません。

因と果の間に縁が働きかけ、あらゆる物事は、この縁の関わり方によって結果も変わってくるのです。「因

イナに伝わって、それを漢字で表して「娑婆（しゃば）」という言葉になったそうです。

サハー君はすくすくと良い子に育ってくれました。日に二度、朝夕、それこそ雨でも嵐でも散歩に連れ出しているうちに、父から「そういうたら、都耶子、風邪を引かんようになったなあ」と言われました。何かあると直ぐに風邪を引く、真夏でも奈良の家で寝込むんでは、皆に迷惑をかけることが多かったのに、気が付くと元気になっていました。「サハーのお陰やなあ」と言われました。こちらが飼っていると思っていましたが、飼わせてもらっていたのかも知れません。

サハーは大好きな卵焼きをもらう時だけ父に擦り寄るものの、一切れ貰うともう知らん顔。それが、平成八年の晩秋に父が病に伏せってからは、一緒にベッドに寝るようになりました。私のベッドには嫌がって来なかったくせに。父の病いが癒えてくると、抱っこから足元に寝るようになり、もっと良くなるとベッドの傍らで寝るという事でした。父に添い寝して父の病を自分が受け持ってくれたのでしょうか。そしてサハーは父の亡くなる十日前に旅立ちました。あたかも先に行って父を待ってくれるかのようにでした。そして思い返せば、初めて父に書を書いて欲しいと頼んだときに選んだのは、『忍び忍んでなほ忍ぶ』という言葉でしたっけ。

・縁・果」の成り立ちを充分に認識した時、ものの見方、考え方が変わってきます。

どんなに努力しても、それだけでは結果は生まれないことが多いもです。どうしても周囲の人の援助が必要です。今こうして生きている事はたくさんの縁を頂き、その中で生かされているのです。様々な因縁を深く感じた時、人は謙虚に生きられるようになるのです。私達は、お念仏の教えに遇うことが出来ました（因）。そのお念仏を称えるか称えないか（縁）、そのことによって大きく人生が変わってくる（果）のです。日々お念仏に励んで参りましょう。

（総本山知恩院布教師会ホームページより）

## 書への誘い（いざな）

「鎮魂」

故林錦洞書

貞林院瑞正寺 住職 林 清方

この作品は平成五年十二月に書かれたもので、添え書きには「学徒出陣五十周年記念鎮魂之字を以て為同期戦死病没物故諸霊證大菩提 平成五年癸酉極月小日 十四期生良性僧正錦洞 合十」とあります。先の大戦では戦局悪化により兵力不足が顕著となったため、これまでの学生徴兵猶予が撤廃され十万とも言われる学生が学業半ばで戦地に赴き、多くの若者が戦死されました。昭和十八年十月二十一日には明治神宮外苑競技場にて出陣学徒の壮行会が盛大に行われ、先代林錦洞もここで行進をしていた一人です。その後海軍飛行予備学生として訓練を受けている最中に終戦を迎えましたが、多くの海軍第十四期同期生が特攻などで散華されました。この作品は学徒出陣五十周年にあたり戦死された同期生への鎮魂の意を持って書かれたものと思われます。

本年十月にはこの学徒出陣八十周年を迎えることとなりますが、あらためて戦死されました多くの方々に対してご冥福をお祈りしたいと思います。

合掌

# 秋の彼岸法要ご案内

本年の秋彼岸法要につきましては左記のとおり行いますのでどうぞお参りください。

今回より春の彼岸法要と同様に、檀信徒の皆さまには、これまでどおり本堂内にお入りいただき法要にご参列いただけます。

塔婆をご希望の方は、お早めに電話・ファックス・メール等にて寺までお申し込みください。

記

九月二十三日（土）正午

塔婆料　三千円

回向料（お布施）志納

＊当日寺にお参りされる方で、事前に塔婆・回向料をお振り込みされている方もお供物をお渡ししますので必ず受付までお越しください。

＊本堂内の換気には努めておりますが、本堂にお入りになる際は、手指消毒のご協力をお願いします。なおマスクにつきましては各自のご判断でお付けください。

## 「先代林錦洞内室林暎子七回忌法要を厳修」

本年は先代内室林暎子の七回忌を迎えました。去る八月六日に家族のみで当山本堂にて七回忌法要を厳修いたしました。

母は地元葛飾小合の瑞正寺（現貞林院瑞正寺）に生まれました。父親は先代の書道の師でもある林祖洞で、一人娘でありましたが大変厳しく育てられたようです。

書道のご縁で先代林錦洞を婿養子に迎え、長く寺庭婦人として寺を支えてきました。

平成二十九年八月十七日に享年九十四歳にて往生しましたが、病院が大嫌いな母でしたので、お陰様で数年の訪問診療にて療養し、自宅で穏やかな最期を迎えることができました。これからも浄土から寺を見守ってほしいと思います。

合掌

「瑞香院貞譽暉壽暎芳大姉」

## まもなく浄土宗は開宗八百五十年を迎えます

来年の令和六年は法然上人が浄土宗を開かれて八百五十年を迎えます。法然上人は比叡山の黒谷にある青龍寺にて長年修行と勉学に励まれた後に「南無阿弥陀仏」と称えることで、すべての人が救われることを確信し比叡山を下り、京都・吉水の地（現在の知恩院）でお念仏の教えをひろめました。

この良き勝縁にあたり全国の檀信徒の方々には法然上人のみ教えに感謝の意味で「令和版結縁交名（けちえんきょうめい）」に「南無阿弥陀仏」を書いて頂き、それを知恩院にお納めいたします。寺にお越しの際はどうぞお書き下さい。ご奉納されますと「切り絵のご朱印」を差し上げます。

「筆ペン・サインペンで上からなぞって書けます」

（貞林院瑞正寺）